ホモ・テクニクス

——加藤尚武編『ハイデガーの技術論』を読む——

高橋　透

本書は，タイトルのとおり，ハイデガーの技術論に焦点を絞って論じた一書である。まずは，全体の簡単な概観。全六章のうち，編者の加藤が計四章，轟孝夫，瀧将之がそれぞれ一章づつ担当しているが，加藤担当による第一章と第二章は，ハイデガーの『技術への問い (Die Frage nach der Technik)』の一部と，『転回 (Die Kehre)』の一部が，ドイツ語原文を掲載しつつ，それにランニング・コメンタリーを付すという形で論じられている。轟担当の第三章は，ハイデガーの技術論をハイデガー思想の全行程において追跡する。この章には付録として技術にかかわるハイデガーの発言が，彼の諸テキストからアンソロジー的に引用されている。第四章では瀧が「ゲシュテル」の日本語訳の変遷を概観し，第五章で加藤が柳宗悦の民芸論とハイデガーの技術論を比較検討したのち，第六章でやはり加藤が「ハイデガー〈技術論〉の理論的問題点」を指摘している。全体として，ハイデガーの技術論をコンパクトにまとめた手引書と言えるであろう。

これまでハイデガーの技術論は，主題として論じられることがあまりなかったように思われる。これは，近年英語圏で，ハイデガーの技術論と現代テクノロジーを結びつけて論ずる論文を徐々に目にするようになったが，そうした流れの一環と見ることもできるかもしれない。しかしいずれにせよ，現代テクノロジーの近年における「暴走」といわれる状況に，哲学がどのように対処し引き受けていくのか，という問いが逼迫したことの結果であることには異論の余地はない。ここでは，こうした大きな流れのなかに，本書『ハイデガーの技術論』を置き，とくに第六章の議論に論点を絞って，その意義を考えてみたい。

第六章で加藤が提出しているハイデガーの技術論に対する批判の要点は以下のとおりである。現代テクノロジーの展開に照らしてみた場合，ハイデガーの技術論の限界はどこにあるのか。端的に言えば，ハイデガーの主張するように，技術の「本来的な」あり方，技術の「本来性」があるのかどうか，である。

まず，ハイデガーが直面し問いの渦中に投じた近代技術の問題点を確認しよう。「まえがき」で加藤が要約しているように，「人間が主体となり，存在者の存在を対象化して表象し，その表象の確知性としての真理を手引きに，大規模に大地を支配してゆく過程（近世形而上学）が，技術文明」へと展開される。近代技術は，このような表象 (vor-stellen) として，対象に「強要 (Herausforderung)」しつつ，対象から「取り立て (bestellen)」をおこない，対象を生産物，「調達物 (Bestand)」に変形し支配していく。ごく簡単に言って，こうした Stellen の総体が「ゲシュテル (Ge-stell)」と呼ばれる事態である。ゲシュテルとはしたがって，人間化という行為の真髄である。しかし，ここでは詳述しえないが，ハイデガー

は，ゲシュテルによる人間化に取り込まれきれないものに着目する。対象には，対象化しきれないものが，ゲシュテルの覇権を免れるものが憑きまとっている。対象のこうした影の部分を含めてはじめて，対象は自己の本当の姿を得るのであり，「本来的な」あり方になるというのだ。そしてこうした影を孕んだ本来のあり方をたえずそれとして受け入れようとする挙措が，ハイデガーの言う「本来の」テクネーのあり方である。加藤が提起している問題のひとつは，対象にこのような「本来的な」あり方がはたしてあるのかどうか，またテクネーに「本来の」あり方があるのかどうか，である。

加藤は同書の最後でこう問うている。「ハイデガーが〈技術〉を変質させる〈存在の歴史〉があると論じているが，実は，技術そのものが，存在の歴史の実態を変質させているのではないだろうか」，と。もしわたしがこの問いを正しく理解しているとすれば，加藤がここで疑問視しているのは次のことであると考えられる。すなわち，ゲシュテルに依拠する近代技術というテクネーの非本来的なあり方を本来的なテクネーのあり方へと転換させる根拠はハイデガーにとっては対象の本来的なあり方，つまり「本来的な」「存在」であるが，こうした「存在」そのものが，本来性という考え方そのものが，すでに（近代）「技術」という非本来的なものによって侵食されているのではないか，と。端的に言えば，本来性なるものは，はたして存在するのか，と。

加藤は彼の問いを発するにあたって，「代理母」と「性同一性障害」の「治療」の例を挙げて，これらの技術がハイデガーの技術論の枠組みでは扱いきれない，と論じている。こうした限界は，思想家とても時代の子であることを考慮するならば，いたし方ないことであろうが，それでもこの観点が興味深い論点を浮上させることはたしかである。ここでは加藤とは異なった二つの例をもとに，ハイデガーの技術論と現代テクノロジーの問題との関係を考察して，書評を締めくくることにしたい。

例のひとつはクローン・テクノロジーであり，もうひとつはサイボーグ・テクノロジーである。クローン・テクノロジーは同一の遺伝子をもった生物を生み出す技術であるが，しかし同じ技術を使って，異種の生物との「キマイラ」を誕生させることもできる。たとえば，ヒトとブタのあいのこ。このテクノロジーは，ブタにヒトの遺伝子をもった臓器を製造させ，移植用臓器の慢性的な不足の解決策として注目されている。（イアン・ウィルムットがクローン羊「ドリー」に引き続いて作成した「ポリー」が，こうした「動物工場」のプロトタイプである。）このような医療目的が謳われてはいるものの，いずれにせよ，ヒトとブタのハイブリッドが技術的に可能な段階にあることは事実である。このテクノロジーは，人間と動物との境界を不確定にするのだ。さらに，サイバネティクス研究者のケヴィン・ワーウィクの試みでは，たとえば人間の神経系とコンピュータを接続することによって，人間の五感にはない，いわゆる「第六感」を獲得することができた。この場合の第六感とは，超音波を人間の神経で直接捕らえることによって，視覚はもとより，触覚，聴覚，味覚，嗅覚のいずれも用いることなく対象の存在を認知することである[1]。ワーウィ

1) Kevin Warwick, *I, Cyborg*, Century, London, 2002, p. 261.

クは，これをたとえば盲人のために役立てたいと考えているが，いずれにせよ，ここで人間は，機械と融合し，蝙蝠のような動物の能力と一体化している。つまり人間，機械，動物の境界が不安定化されるのだ。人間でありながら人間ではないような，こうした「ポスト・ヒューマン」的な存在を，現代テクノロジーは生み出していく。

そうであれば，古来の哲学の問いをあらためて問わねばならないであろう。われわれとは誰か，人間とは何か，と。人間に，はたして「本来性」はあるのか，と。「人間」とは，元来可変的，変幻自在な存在であって，現在人間として通用している形態は，ある一時期のものにすぎないのかもしれない。本来的であると思われていたものは，たえずその本来性を変化させ，この意味で，たえず非本来的なものによって侵食されていく。現代テクノロジーが突きつけるのはこうした事態である。

近代技術の非本来性を指摘するとき，ハイデガーも，こうした事態に，つまりテクノロジーの突きつける，「人間」の根源的な可変性，変幻自在性に直面していたはずである。しかし彼はテクネーを「本来性」への橋渡しであると考えることで，この事態の洞察から退いていった。別言すればハイデガーは，人間とはテクノロジーにもとづく根源的に可変的な存在であることを，すなわちこうした根源的な可変性に晒された「ホモ・テクニクス」であることをわれわれに示唆するにとどまったのである。この示唆の遺産を受け継ぐことが急務となるであろう。

加藤尚武編『ハイデガーの技術論』理想社，二〇〇三年刊